

した。この値の持つ物理的な意味については、さらに考察を重ねる必要があるが、(111)配向-fcc-フラーレン層によって得られたこと、そしてランダム配向化に伴い理想係数は増加し、2を大きく超えたことは注目すべきことである。また、本共同研究を通じて、無機半導体/有機半導体ヘテロ接合体の整流性や太陽電池特性が、i層として働く半導体層を導入することによって大きく変化することも明らかになっている。

本研究を遂行するに辺り、設備を使用させて頂くと共に、活発な討論をして頂きました平本昌宏先生ならびに研究室の方々に厚く御礼申し上げます。

文献：M. Izaki, T. Saito, T. Ohata, K. Murata, B. M. Fariza, J. Sasano, S. Watase, M. Hiramoto, Hybrid Cu_2O diode with orientation-controlled C_{60} polycrystal, *Chem. Mater.*, submitted.

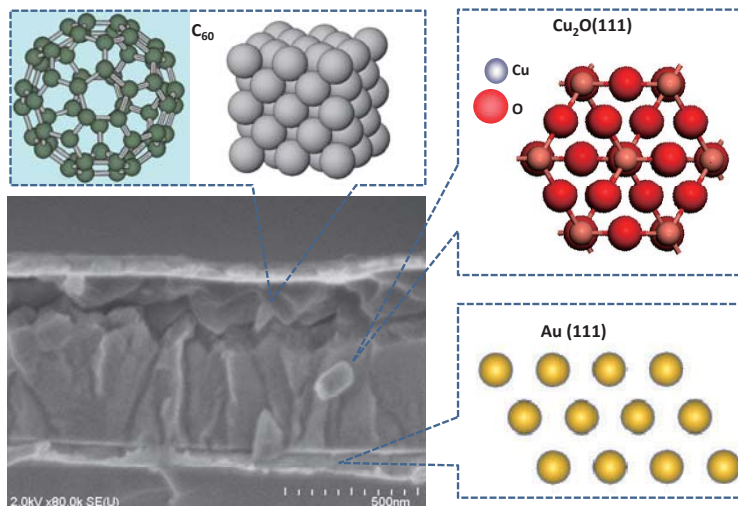


図1



いざき・まさのぶ
2008年10月より現職。研究テーマは、ソフト溶液プロセスによる半導体・強磁性体酸化物膜の形成と太陽電池などの半導体素子への展開。

共同利用研究ハイライト

若手研究会等 「分子科学夏の学校の講義内容検討会」報告

赤瀬 大 広島大学大学院理学研究科化学専攻 博士課程後期2年

平成23年度共同利用研究（前期）「若手研究会等」の支援を受け、「分子科学若手の会夏の学校 講義内容検討会」を開催させていただきました。ここでは、検討会について報告するとともに、それに関連する分子科学若手の会夏の学校の様子や分子科学若手の会の近況について紹介させていただきます。

分子科学若手の会は、分子科学の全分野から広く若手が集まった分子科学の分野では唯一の若手の会です。若手の会は大学院生が主体となって運営し、毎年8月に分子科学若手の会夏の学校（以下、夏の学校）を開催しています。

夏の学校は、各分野を専門とする講師

の先生から直接その分野の基礎から最先端の研究まで講義形式で学ぶことができる分科会をメインに、講師の先生による全体講演、参加者が自身の研究内容を発表するポスターセッションなどをプログラムしています。分子科学若手の会は公に特定の学会、研究機関に属しているわけではありませんが、1961年から続いているこの夏の学校の開催にはこれまでも分子研からの援助および分子研関係者の方々からも講師を引き受けていただくなどのご協力をいただけてきました。また、分子科学会の若手支援事業からも、事業が始まった2009年度より支援をいただいています。本年度も、分子研の共

同研究プログラムに採択されたおかげで、第51回目の夏の学校を開催することができました。

7月9日に「分子科学若手の会夏の学校 講義内容検討会」を開催しました。参加者は分科会の講師の先生方、分科会の担当者である学生、および他の若手の会の学生ら計13名となりました。本年度は、都合により分科会の数が減少したために例年より参加者が減少しました。検討会では、講師の先生が書かれたテキストの内容についての議論がおこなわれ、また、夏の学校での講義の形式や進め方などの詳細が詰められました。検討会自体が大変充実した

ものになったばかりでなり、続く夏の学校を円滑に進めるためにも有意義な検討会になりました。また、広い分子科学の分野でなかなか交流できない学生が分子研で集まったことで良い刺激を受けました。今回の検討会は日帰りということもあり3時間あまりで終了しましたが、数少ない機会なのでもう少しプログラムがあっても良いと感じました。来年度以降の課題にしたいと思います。

夏の学校は、8月22日から26日にわたって京都府立ゼミナールハウスで開催されました。分科会の数の減少により参加人数の減少が懸念されましたが、前年度(57名)を上回る61名の参加者を集めました。

分科会では、京都大学の安藤耕司先生に「分子多体系における量子移動過程の理論とシミュレーション」(第一分科会)、京都大学の加藤立久先生と分子研の古川貢先生に「高スピンを観る」(第二分科会)、名古屋大学の山本史典先生に「振動解析再入門」(第三分科会)というタイトルでそれぞれ講義をしていただきました。さらに、講師の先生方

には全体講演で自身の研究内容についての講演もしていただき大変盛況でした。ポスターセッションでは学生から37件の発表があり、本年度は1件あたり2回の発表の機会を設けたことで活発な議論がおこなわれ、学生間の交流を深めることができました。

分子科学若手の会では、残念ながら久しく夏の学校が唯一の定常的な活動となっています。これは、昨年の分子研レターズ63の36ページの共同利用研究ハイライトでも少し触れられているように事務局を担当している学生が年度ごとに全員入れ替わってしまうことが一つの大きな要因でした。そのため、昨年度から事務局のメンバーが2年目も新しい事務局のメンバーの補佐をする体制に変更しています。これにより新体制への引継ぎが円滑に進むとともに、若手の会として新たな活動を始めやすくなりました。

一つの試みとして今回の夏の学校では、参加者に若手の会企画の研究会の開催についてアンケートを取りました。アンケートの結果、4分の3の学生が「研究会があれば参加したい」と思っている



ことがわかりました。分子科学若手の会では現在、研究会の開催を前向きに検討しているところです。研究会を開催するとしたら「若手研究会等」に申請して分子研で開催できればと考えていますので、今後も引き続き分子研および皆さまのご理解とご支援をよろしくお願いします。

また、夏の学校の50年を記念して、過去の夏の学校に学生として、また講師として参加された方々からの寄稿をいただき、「分子科学若手の会夏の学校50周年記念文集」の制作を行なっています。この文集の制作にも分子研のご協力をいただけることになり、非常に感謝しております。今年度内の完成を予定しておりますので、機会があればご覧いただけると幸いです。



集合写真